A-7

古典サンスクリット複合語の morphology/syntax の不整合[1]

内ケ崎　哲[2]

要旨

古典サンスクリット複合語のうち Bahuvrīhi（BV）に焦点を当てて、カーリダーサの代表作であるラグ・ヴァンシャを検討した。その結果、BV 内の第一要素を外部の語が修飾している用例が認められた。こうした用例は、古典サンスクリットでは時として見られるが、パーニニ文法に反し、morphology/syntax の不整合があるものと考えられた。さらに、本用例の BV は、外部の語とこのような不整合を起こしながら、関係節のように他の名詞を主要部とする名詞句を導く機能を持つことも確認された。ラグ・ヴァンシャ注釈者のマッリナータは不整合に言及していないため、この不整合がどのように認識されていたかは不明であるが、容認された用法であったと思われた。古典サンスクリットでは複合語を繁用する傾向があるため、複合語の用法をより詳細に検討することは morphology/syntax の関係を通言語的に理解する上で有用である可能性が示唆されたと考えられた。

１．はじめに

Syntax は語の内部構造に影響を与えることはできないと言う（Anderson, 1992: 84）。また、通言語的に共通する語の概念はなく、morphology と syntax についても同様であるとされる（Haspelmath, 2011: 61）。複合語については、Trips & Kornfilt(2017: 1)は複合語の検討は morphology と syntax の関係を明らかにするために重要であると述べている。一方で、複合語が特別に発達し、関係節等の役割も担うと言われる古典サンスクリット（辻、1974: 223）の複合語における検討は体系的に行われていないという（'… have not been systemically studied in modern grammar …' Kiparsky 2009:82）。

そこで、本稿では古典サンスクリット複合語のうち Bahuvrīhi（BV)を例に取り、カーリダーサ（Kālidāsa）の代表作であり、複合語を好んで用いる美文体叙事詩（mahākāvya）である（辻 ibid）ラグ・ヴァンシャ(Raghuvaṃśa: Ragh.)での用例について、語、複合語、関係節の関係を morphology と syntax の観点から検討した。

以下、2 節で古典サンスクリット複合語、3 節で複合語の morphology/syntax における不整合を概観し、4 節で BV 用例の考察を行った。5 節は結語である。

２．古典サンスクリット複合語

伝統的に、複合語は Dvandva（並列複合語)、Tatpuruṣa（限定複合語)、Bahuvrīhi（BV）(所有複合語)、Avyayībhāva（不変化複合語）の 4 種類があるとされる。

本稿で検討対象とする BV は、何らかの意味で所有・所属を表わす形容詞として、複合語の要素以外の事物を修飾する。原則、前半の要素と後半の要素からなり、前半要素が後半要素を何らかの形で限定するが、要素の数に制限はない。特に発達した形式は、「過去受動分詞+名詞」である（辻 1974: 233)。

---

[1]（公財）中村元東方研究所専任研究員有賀弘紀氏から、多くの貴重な助言をいただいた。ここに深く感謝申し上げる。本稿の誤りはすべて発表者の責任である。

[2] uchigasakit@oa.jful.jp

2-1. 複合語の形成

複合語を作るためには変化語尾を持つ複数の語を複合するが、以下の規則により変化語尾が削除される（Kiparsky 2009: 81）。

(1) supo　dhātuprātipadikayoḥ (P. 2.4.71*)　* Pāṇini の Aṣṭādhyāyī 中の規則（Katre 1987）
sup.G[3]　root-stem.du.G
'Case endings in roots and stems are deleted'

以下により、2 つの語が複合される場合、第一要素となる語の変化語尾だけが削除され複合語となる。

(2) anekam anyapadārthe (P.2.2.24)
more-than-one.n.sg.N other-word-meaning.m.sg.Loc
'More than one words form a compound denoting another meaning connoted by those individual words'.

一般的に、補語、修飾語等の'subordinate'は複合語内の第一要素であり、主要部は第二要素となる(3)。BV では、修飾される主要部が複合語外にあるため、複合語内の語はいずれも'subordinate'である（Monier-Williams 1899）。

(3) upasarjaṇaṃ　pūrvam (P.2.2.30)
subordinate.n.sg.N　prior.n.sg.N
'A subordinate member occurs as a prior member.'

また、「過去能動分詞+名詞」の BV では、過去受動分詞は前半に置かれる(P.2.2.36)。

2-2. Bahuvrihi 形成の詳細（過去受動分詞を含むものを中心に）

以下に、順を追って二語から成る BV の形成を示す（Junnarkar 2014: 109）。

A. 独立した二語の連続を BV にする。イタリック体で示す *ūḍhaḥ* が過去受動分詞で、rathaḥ とともに主格である。

(4) *ūḍhaḥ*　rathaḥ
drawn.m.sg.N　chariot.m.sg.N
'A chariot has been drawn.'

B. 次に、BV が修飾する主要部名詞と BV との間の格関係を決める必要がある。まず、その格関係に該当する関係代名詞が置かれる。この場合では、Instrumental が該当する。

(5) *ūḍhaḥ*　rathaḥ　yena
drawn.m.sg.N　chariot.m.sg.N　by which.m.sg.Inst
'By which a chariot has been drawn.'

C. ここで、主要部名詞の'anaḍvān.bull'を置けば、関係節' ūḍhaḥ rathaḥ yena'に導かれる以下の名詞句が得られる。複合語としなければ、これが完成形となる。

(6) *ūḍhaḥ*　rathaḥ　yena　anaḍvān
drawn.m.sg.N　chariot.m.sg.N　by which.m.sg.Inst　bull.m.sg.N
'A bull by which chariot has been drawn.'

D. 最後に、'ūḍhaḥ'と'rathaḥ'を複合語とする（ボールドで示す）。この複合語は形容詞として機能するため、格関係を表す関係代名詞は不要となり、主要部名詞の性・数・格と一致し(7)が得られる。

---

[3] G:genitive; Ac:accusative; N.nominative; Inst:instrumental; Abl:ablative; Dat:dative; Loc:locative; Voc:vocative; sg:single; du:dual; pl:plural; m:masculine; f:feminine; n:neuter; Correl:correlative; Rel:relative; Imp:imperative

(6)と(7)は構造が異なるが同じ意味を持つ。

(7) **ūḍharathaḥ** anaḍvān
drawnchariot.m.sg.N bull.m.sg.N
'A bull by which a chariot has been drawn.'

以下に Instrumental 以外の格関係をもつ BV も例示する（Junnarkar ibid)。

(8) *śritaḥ* alayaḥ yat ➡ **śritāli** paṃkajam
resorted.m.pl.N bees.m.pl.N to which .n.sg.Ac n.sg.N lotus.n.sg.N
'A lotus to which bees have resorted.'

(9) *upahṛtaḥ* paśuḥ yasmai ➡ **upahṛtapaśuḥ** rudraḥ
offered.m.sg.N animal.m.sg.N to whom.m.sg.Dat m.sg.N Rudra.m.sg.N
'Rudra to whom an animal has been offered.'

(10) *uddhṛtaḥ* odanaḥ yasyāḥ ➡ **uddhṛtaudanā** sthālī
taken-out.m.sg.N boiled-rice.m.sg.N from which.f.sg.Abl f.sg.N cooking-pan.f.sg.N
'A cooking pan from which boiled rice has been taken out.'

(11) pītaṃ ambaraṃ yasya ➡ **pītāmbaraḥ** hariḥ
yellow.n.sg.N garment.n.sg.N of which(whose).m.sg.Gen m.sg.N Hari.m.sg.N
'Hari of which (whose) garment is yellow.'

(12) bahuni ratnāni yasyām ➡ **bahuratnā** vasuṃdharā
rich.n.pl.N jewel.n.pl.N in which.f.sg.Loc f.sg.N earth.f.sg.N
'The earth rich in jewels (the earth in which jewels are rich).'

なお、実際には二語を超える BV が用いられることが多い。Ragh. 16 章第 14 詩からその例を示す。以下の'hata'が過去受動分詞である。BV の構造は、[[[dava-ulkā].Inst [hata]][śeṣa-barhā]].N である。

(13) kurīḍā-mayūrā dava-ulkā-hata-śeṣa-barhāḥ
pet-peacock.m.pl.N flame-meteor-destroyed-remnant-feather.m.pl.N
'pet peacocks possessing a remnant of their feathers that are destroyed by flaming meteors'

小括

- ◆ 複合語は変化語尾を持つ語を二つ以上から作られるが、複合語最後尾の変化語尾のみが残る。
- ◆ 補語、修飾語は複合語の前半に置かれ、主要部がある場合は最後尾に来る。
- ◆ Bahuvrīhi のうち特に発達した形式では、前半に過去受動分詞を持ち、複合語内の各要素より成る関係節を形成し、外部の主要部名詞を修飾する。

3. 複合語の morphology/syntax における不整合

3-1. 複合語と外部の語との関係

以下の Aṣṭādhyāyī 中の規則はあらゆる複合語を作る際に適用される（Kiparsky 2009: 82)。

(14) samarthaḥ padavidhiḥ (P. 2.1.1.)
semantically-related.N word-operation.N
'An operation on words is semantically related.'

例えば、以下の例では、文章の意味は明確である(Junnarkar 2014:20)。

(15) bhartā bhuvaḥ patiḥ nāgānām
lord.m.sg.N earth.f.sg.G king.m.sg.N snake.m.pl.G
'The lord of the earth is the king of snakes.'

ところが、(2)により格語尾をもつすべての語は複合語とすることができるため、(15) の例では以下のの様な複合語の形成も可能となってしまう。

(16) bhartā bhūpatiḥ nāgānām
lord.m.sg.N earth.king.m.sg.N snake.m.pl.G
'The lord of snakes is the earth-king'

ところが、'lord'は'earth'に限定され、'king'は'snake'に限定されるため、'earth'と'king'を複合語とすることは(14)によって妨げられると考えられる。

また、(14)の規則は外部の修飾語は複合語内部要素（主要部でない要素）を修飾することができないと解釈される（Kiparsky ibid, Subrahmanya Sastri 2015:189)。以下の(17)と(18)を比較する。

(17) ṛddhasya rājñaḥ puruṣaḥ
rich.m.sg.G king.m.sg.G servant.m.sg.N
'A servant of a rich king'

(18) ṛddhasya rājapuruṣaḥ
rich.m.sg.G king.servant.m.sg.N

(17)の'king'と'servant'を複合語とすると (18) になるが、その意味は 'rich (king's servant)'であり、(17)の様に'a servant of a rich king'と解釈できない。つまり、(18)は'(rich king)'s servant'ではない。したがって、複合語外部の語は、複合語内の格語尾をもたない第一要素を修飾することができないと考えられる（Gillon 2009: 99)。

3-2. Morphology/syntax の不整合

しかし、Patañjali は、同様の例として以下のような反例も提示している(Subrahmanya Sastri 2015:182)。

(19) devadattasya gurukulam
Devadatta.G teacher-family.N

これは、(14)に従うならば、(18)と同様に、'Devadatta's teacher-family'と解釈されるはずである。しかし、通常は'the family of Devadatta's teacher'と理解される。その理由を Patañjali (Subrahmanya Sastri ibid)は、実例を尊重すると属格は複合語全体に及ばないことがあると述べている。また、Abhyankar（1986:50）も同様の説明をしている。また、Kiparsky (ibid)は、「個人の属性が個人の所属するグループの属性に継承される」と説明する。つまり、'teacher.guru'の属性が'family.kulam'に継承されるため、'Devadatta's teacher-family'は、'the family of Devadatta's teacher'と解釈可能になると述べている。ところが、(18)では同様の説明はできないとしている。

さらに、Kiparsky (ibid)は、古典サンスクリットでは以下のような例も見られることを示している。

(20) pīnābhyāṃ (a) madbhujābhyāṃ(b) bhramitagurugadāghātasaṃcūrṇitoroḥ(c)
brawny.Inst my-arms.Inst whirled-heavy-club-crushed-thigh.G
'whose thighs have been crushed by the strokes of the heavy club whirled around by my brawny arms' (*Harṣacarita* 5.35)

(20)において、(c)が複合語で、(a)と(b)（by my brawny arms）はその修飾語である。(a)と(b)は複合

語内部の'bhramita.whirled'に対して外部から修飾しているため、(14)に反する（Kiparsky ibid)。

さらに、複合語はそれ自体で完結した意味を表わすが、時にはその要素の一つ（主として第一要素）が外部の語と関係を持つことがあるとも言われている（辻 1974: 223)。以上のように、(14)にもかかわらず、実際には、(19)、(20)のように外部の語が複合語内の要素を修飾する例が認められる。

小括

◆ 文中の隣接する語は、意味が互いに関連していれば複合語とすることができる。

◆ 複合語外の語を、複合語内部の第一要素に意味において関係付けることはできない。ただし、これに従わない用例が古来より認められている。

4. Bahuvrīhi（BV）用例の考察

ラグ・ヴァンシャ 16 章 88 詩のうち BV で morphology/syntax に不整合が見られたのは、第 9 詩、第 16 詩および第 34 詩であった（Nandargikar 1897: 497, 500, 506)。そのうち 2 例を考察する。

4-1. 用例 1（第 34 詩）

(21) pūrvajānāṃ (a) kapilena (b) roṣāt (c) bhasman-avaśeṣa-kṛta-vigrahāṇām (αβγ-δ)
ancestors.m.pl.G Kapila.m.sg.Inst wrath.m.sg.Abl ash-remain-made-body.m.pl.G
'of ancestors by Kapila in wrath bodies made remain of ash'

(21)はいずれも名詞で、(a), (b), (c)は非複合語、(αβγ-δ)は BV(α, β, γ は語幹、δ は語幹+格語尾)である。複合語の第一要素である(αβγ)内の過去受動分詞の kṛta.made に対して、(αβγ-δ)の外部から、(b)が動作主として、(c)が原因を表す修飾語として作用して、全体が BV であるかのような（22）を得る。

(22) [(b).Inst (c).Abl (αβγ-δ).G].G

これは(14)に違反し、morphology/syntax の不整合があると考えられる。さらに、(22)は(a)を修飾し、(a)を主要部とする名詞句を形成することから以下を得る。

(23) [(a).G [(b).Inst (c).Abl (αβγ-δ).G].G].G

(23)は、(αβγ-δ).G が(b)と(c)の修飾を受け、(a)を主要部とする関係節を構成するため（24）を得る。

(24) [(a).m.pl.Gen [(b).Inst (c).Abl (αβγ).m.pl.Nom (δ).m.pl.Nom].G].G

(11)を参照し、(24)に関係代名詞(ここでは yeṣām)を追加すると以下を得る。

(25) (a).m.pl.G (b).Inst (c).Abl (αβγ).m.pl.N (δ).m.pl.N
pūrvajānāṃ yeṣām.m.pl.G kapilena roṣāt bhasmāvaśeṣīkṛtāḥ vigrahāḥ
of ancestors whose by Kapila in wrath were made remain of ash bodies

以上、語である(a),(b),(c)と複合語の(αβγ-δ）が連続する(21)は、(a)を主要部として、(b), (c), (αβγ), (δ)から成る関係節に導かれる名詞句であることがわかる。

この詩においてカーリダーサが不整合と思われる書き方をした理由は不明である。'kapilena'と'roṣāt'を複合語の中に取り込むと複合語が長大になり過ぎると考えたのであろうか。しかし、第 16 章では BV は 6 語から成るものが 1 例、5 語が 4 例、4 語以下は多数認められた。仮に、kapilena と roṣāt を含む複合語としても 6 語であり、長大過ぎることが理由だったとは必ずしも言えないであろう。

別の可能性として、'bhasmāvaśeṣīkṛtāḥ'が慣用形である'bhasmīkṛ'に由来する（P.5.4.50）ため、'kapilena'と'roṣāt'の配置に影響を及ぼした可能性がある。また、第 16 章が upajāti（各 11 音節からなる同形の 4 つの肢）の形式で書かれた叙事詩であることから、韻律を考慮した結果かもしれない（複合語

中では、‘kapilena’は’kapila’、’roṣāt’は’roṣa’となる)。

4-2. 用例 2（第 9 詩）

この例も、BV に morphology/syntax の不整合があると考えられるが、関係節中に見いだされた点が第 34 詩と異なる。語（下線）と BV(二重下線)の 4 語が関係節、ボールド部分が先行詞である。

（26） tam abravīt sā guruṇā navadyā yā nītapaurā svapadonmukhena
him said she father.m.sg.Inst faultless Rel.f.sg.N carried-citizen.f.sg.N heaven-raising.m.sg.Inst
tasyāḥ **puraḥ** saṃprati vītanāthām jānīhi rājann adhidevatāṃ māṃ
that.Correl.f.sg.G city.f.sg.G at present lordless.f.sg.Ac know.Imp king.Voc presiding-deity.f.sg.Ac me
‘She, faultless, said to him, “Know me, O king, to be the lordless presiding deity of that city citizens of which were carried to heaven by your father while raising to heaven.”’

関係節内の’guruṇā svapadonmukhena’は Instrumental であることから動詞あるいは名詞との格関係が必要であるが、定動詞あるいは修飾する名詞が見当たらない。コピュラが省略されていると考えることもできるが、’guruṇā’を kāraka（意味役割を与える 7 つの格）とするためには、BV である ‘nītapaurā’（過去受動分詞’nīta‘+名詞’paura’）の前半要素である’nīta’と関連付けるのが妥当と思われる。ここで、（21）と同様の morphology/syntax の不整合を起こすことになる。なお、BV は修飾する性・数・格の一致する名詞が必要であるので、’yā.Rel.f.sg.N’がそれに該当する。さらに、Mallinātha は、’yā.Rel.f.sg.N’は’puraḥ.city.f.sg.G’を指すと指摘している。

ここで、不整合を回避するための方策を仮に考えてみる。’guruṇā’は Instrumental の格語尾を持つため、本来は対応する定動詞が関係節内に存在するであろう。したがって、(11) を参考にして‘nītapaurā’をヴィグラハ (vigraha: 個々の語に分解) し、以下の様に複合語となる前の形にすることが考えられる。

(27) yasyāḥ pauraḥ nītaḥ guruṇā svapadonmukhena
of which.Rel.sg.f.G citizen.sg.m.N carried.sg.m.N father.m.sg.Inst heaven-raising.m.sg.Inst

この場合、‘yasyāḥ.Rel.f.sg.G’が導く新たな関係節（27）が、原文の’yā. Rel.f.sg.N’が導く関係節（28）を置き換えているとも言えよう。(27) と比較しやすい様に、以下(28)では原文（26）の語順を変更した。

(28) yā nītapaurā guruṇā svapadonmukhena
Rel.f.sg.N carried-citizen.f.sg.N father.m.sg.Inst heaven-raising.m.sg.Inst

もう一つの不整合回避の方法として、この BV 内に ‘guruṇā svapadonmukhena’を取り込んだ形とすることもできよう。この点では、用例 1（第 34 詩）にも同じことが言える。実際のところ、(13)で見た様に、過去受動分詞の動作主となる語を BV 内に挿入する用例が 16 章中に認められている。この場合は、(26) の主節内の相関辞である’tasyāḥ’は不要となるであろう。

以上、(26)でも（21）と同様の不整合が起きていると考えられた。特に(26)は、関係節中の BV 内の第一要素（過去受動分詞）が定動詞として機能しているように見える点においても、morphology/syntax の不整合があるように考えられた。

5. 結語

本稿では、古典サンスクリット複合語のうち Bahuvrīhi（BV）に焦点を当て、カーリダーサの代表作であるラグ・ヴァンシャ中の用例を、morphology/syntax の不整合の観点から検討した。

BV は名詞ではあるが、主要部である他の名詞を修飾する。さらに、時として(21)、(26)のような

morphology/syntax の不整合を起こし、意味解釈上はあたかも複合語がヴィグラハ（個々の語に分解）されて、関係節のように名詞句を形成することが確認された。

パーニニ文法の P.2.1.1（14）は意味的、統語的に関連する場合に 2 つ以上の語が複合語にすることができると述べているが、今回のような用例が不整合となるかどうかについては直接触れていない。伝統的な考え方に従えば、今回の用例は morphology/syntax の不整合と考えて良いと思われる（Kiparsky 2009）。しかし、マッリナータの注釈中には不整合に対する指摘がなく、不整合がどの程度認識されていたか不明である。このような用例が 16 章に 3 カ所認められたことからも、本用法は古典サンスクリットで容認されていたと考えられた。

特に、(26）では関係節内に定動詞がないことから、BV がヴィグラハされて他の語と共に節を形成しているように見える。韻律の制約や美文体叙事詩であることを考慮しても、使われている BV が形の上では複合語ではあるが、この関係節がヴァーキア（vākya: 文章）のように見える点は興味深い。

サンスクリットの一語あたりの形態素の数はドイツ語が 1.92、近代英語が 1.68 に対して、2.59 と報告されており（Haspelmath & Sims 2010:6)、複合語が多用される特徴が表れている。古典サンスクリット複合語をより詳細に検討することは、morphology/syntax の関係を通言語的に理解する上でも有用である可能性が示唆されたのではないかと考えられた。今後は、BV 以外の複合語も加えると共に、関係文以外の従属副文も視野に入れて検討したい。

参考文献

辻直四郎 1974 サンスクリット文法 岩波書店

Abhyankar, K. Vasudev, and Shukla, J. M. 1986. A Dictionary of Sanskrit Grammar. Oriental Institute, Baroda

Anderson, Stephen. 1992. A-morphous morphology. Cambridge: Cambridge University Press

Gillon, Brendan 2009. Tagging Clasical Sanskrit Compounds. In G. Huet, A. Kulkarni, and P. Scharf (Eds.): Sanskrit CL 2007/2008, LNAI 5402, pp.33–94. Springer-Verlag Berlin Heidelberg.

Haspelmath, Martin. 2011. The indeterminacy of word segmentation and the nature of morphology and syntax Folia Linguistica 45/1, 31-80.

Haspelmath, Martin & Sims, Andrea 2010. Understanding Morphology, Routledge

Jannarkar, P. B. 2014. An Introduction to Pāṇini Book IV. Printed by Createspace.com USA

Katre, Sumitra M. 1987. Aṣṭādhyāyī of Pāṇini. University of Texas Press

Kiparsky, Paul. 2009. On the Architecture of Pāṇini's Grammar. In G. Huet, A. Kulkarni, and P. Scharf (Eds.): Sanskrit CL 2007/2008, LNAI 5402, pp.33–94. Springer-Verlag Berlin Heidelberg.

Monier-Williams 1899. Cologne Digital Sanskrit Dictionaries (version 2.0.738)

Nandargikar, Gopal Raghunath. 1897. The Raghuvanśa of Kālidāsa with the Commentary of Mallinātha. Bombay: Radhabai Atmaram Sagoon.

Subrahmanya Sastri, P. S. 2015. Lectures on Patañjali's Mahābhāṣya, Vol V　The Kuppuswami Sastri Institute, Mylapore, Chennai

Trips, Carola & Jaklin Kornfilt (eds.). 2017. Further investigations into the nature of phrasal compounding (Morphological Investigations 1). Berlin: Language Science Press.